

## サン＝テグジュペリの『星の王子さま』の構成 ——テーマの反復——

加 藤 宏 幸

### 1. 『星の王子さま』の社会的背景

『星の王子さま』 *Le Petit Prince* は1943年3月に出版された。砂漠に不時着した飛行士のところに突然現れた、星から落ちてきた子供の話には、多くの批評家は驚いた。今世紀において、出版当初これほど理解されなかった作品はない。しかし、年月が経つにつれて、その評価はますます高まっている。この作品が高い評価を受ける理由、そしてこの作品の真実を構成の面から明らかにしてみたい。

1939年9月、ドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まった。9月3日、イギリスとフランスがドイツに宣戦布告をする。動員されたサン＝テグジュペリは、オルコント Orconte の2/33 偵察飛行大隊に配属される。彼は1940年の春からますます危険になってくる数多くの偵察飛行を行い、奇蹟的に帰還することもある。『星の王子さま』が着想されたのはこの時期である。ドイツ軍の攻撃が激化し、飛行大隊はオルリー Orly に退却する。毎晩飛行大隊は新しい土地に向かって後退し、ついにアルジェ Alger に移る。

1940年6月、フランスとドイツの間で休戦条約が調印され、8月、サン＝テグジュペリは動員解除になった。彼は船でマルセイユ Marseille に着き、アゲ Agay の妹の家に行き、母と姉に再会する。しかし彼は、このままフランスに留まっていることはできないと思った。飛行機の操縦はできなくなってしまっていたし、検閲が次第に厳しくなり、書いたものを発表することもできなくなっていたので、何もすることがなかったからであった。

彼はアメリカが唯一の避難所であると思った。アメリカでは『人間の土地』 *Terre des Hommes* (1939) の作家として知られていたし、その作品はアメリカでもよく売れていたため、経済的な心配なしに過ごせるからであった。

サン＝テグジュペリは、パスポートと出国ビザを取得するために、ヴィシー Vichy へ行った。サン＝タムール Saint-Amour に立ち寄り、レオン・ウェルト Léon Werth に会う。彼のもっとも親しい友人であるウェルトは、ユダヤ人であり、無政府主義的傾向の思想を持っていた。彼は作家であったが、その書物はいずれも大して売れず、その名もほとんど知られていなかった。ウェルトと過ごしたこの日のことは、ウェルト宛に書かれた『ある人質への手紙』 *Lettre à un otage* (1943) の中で感動的に思い起こされるであろう。

サン＝テグジュペリはソーヌ河の岸のレストランで、ウェルトとペルノー酒を飲んだ。ウェルトは医者にアルコールを禁じられていたが、重要な時には酒を飲んだ。2人の出会いは重要だったからだ。彼らの中には、目に見えぬ祭りが存在していた。穏やかに日が照っていた。混乱を逃れて、ある決定的な文明 *une civilisation définitive* の中に入り、彼らは完全に安らかった。ドイツ占領下のフランスに人質となって残ったウェルトに、『星の王子さま』は献呈されることになるであろう。

1940年12月、サン＝テグジュペリの乗った船は、リスボン Lisbonne からアメリカに向かって出航した。1940年12月31日、ニューヨークに着く。昔の友人に再会し、新しい友人も

見つけたが、彼は敵対する驚くべき数のフランス人がいるのを発見して驚いた。ニューヨークのフランス人は、ペタン Pétain 派、ド・ゴール de Gaulle 派、無党派の3つのグループに分かれていた。大きなアメリカの微小な共同体の中で、フランス人同士が侮辱し合い、密告し合っていて、互いに激しく相争っていた。サン＝テグジュペリは憤慨したが、争いに加わることを避けた。

出版社は、書物を書き、フランスとフランスの敗北についてアメリカ人に語るように彼に勧めた。注文を受けて書くのは気が進まなかったが、何か書かなければならないと思った。フランスは卑怯だとか、フランスは死んだとか、対独協力者を徹底的に粛清すべきだとか言うのを聞いて黙っているのは辛かったからであった。書物を書くように催促していたのは出版社だけではない。ヴィシー派だと彼を非難する海外の対独レジスタンス組織の同胞たちは、書いて弁明することを要求していた。

1941年1月末、ヴィシーの国民会議 Conseil national の一員にサン＝テグジュペリが任命されたという知らせが、ニューヨークで放送される。国民会議は150人の著名人で構成された机上の会議であって、国家元首が祖国再建のための知恵を求めることを目的としたものである。非難の叫びが上がったので、彼は記者会見を行い、その任命はヴィシー政府によって一方的に行われたことを説明した。もちろん、彼は拒否の返答をした。しかし、非難は鎮まらなかった。

1941年12月7日、真珠湾に停泊中のアメリカの艦隊が、日本の海軍航空隊の攻撃を受けて破壊される。翌日、ヒトラー Hitler はアメリカに宣戦布告する。サン＝テグジュペリは、終わりが始まったと思う。

1942年2月、『戦闘パイロット』*Pilote de guerre* がアメリカで出版される。それは戦争・フランス・人間について書かれた作品であり、多くのアメリカ人に読まれた。アメリカが参戦するや否や、サン＝テグジュペリはあらゆる手段を利用して、自分の志願兵役を認めさせようとする。友人たちは皆、こんなにも熱心に戦いに参加しようとするのは異常だと思う。彼は、『星の王子さま』や『城砦』*Citadelle* (1948) を書き続けながらも、戦争を忘れることはなく、戦闘に参加しなければならないといつも考えていた。ついに、ヨーロッパでの戦闘に参加できるようになるべき筋に働きかけを開始する。

1942年11月29日、サン＝テグジュペリは、「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」*New York Times Magazine* に、『到る所にいるフランス人への公開書簡』*Lettre ouverte aux Français de partout* を発表する。フランス人が党派に分かれて争うことを止め、団結して祖国解放のために闘うべきことを訴える。この訴えに、ド・ゴール派の人たちは怒った。すべてのフランス人を同列におき、ヴィシー政府の罪を許すものだ、と中傷した。彼はまたもや、ナチ、ファシスト呼ばわりされることになった。

1942年12月19日、ニューヨークで発行されているフランス語新聞『勝利に向かって』*Pour la Victoire* に、福音主義者ジャック・マリタン Jacques Maritain が、「時々裁かねばならない」*Il faut parfois juger* という表題の長い記事を発表する。そこで彼は、ペタン体制に寛大であると、ペタンとドイツとの共謀の罪を許しているとサン＝テグジュペリを非難した。さらに彼は、ヴィシーの過ちを忘れていると、ペンによって闘うことができるのに第一線でドイツと闘うことしか望まないとサン＝テグジュペリを非難した。尊敬するマリタンの非難に、サン＝テグジュペリの心は深く傷ついた。

1943年2月、レオン・ウェルト宛に書かれた『ある人質への手紙』が出版された。この作品が出版されるや否や、彼に対する猛烈な反感がニューヨークで起きた。亡命者の一人であるの

に、亡命者を侮辱するのは、彼らには許せないことであった。

アメリカ軍の北アフリカ上陸によって、フランス奪回への基盤ができた。サン＝テグジュペリは、アメリカ軍の一員に加えてくれるように頼んだが拒否された。その時ベトゥール Béthouard 将軍が、アフリカの軍隊のために武器調達にやって来た。彼は将軍を通してアメリカ当局に働きかけ、ついに移動証明書の入手に成功する。

1943年3月、サン＝テグジュペリは、船で北アフリカに向かってアメリカを去る。出発の数日前に、『星の王子さま』が出版された。

1943年5月4日、サン＝テグジュペリはアルジェに上陸する。すぐに昔の部隊へ復帰できるよう奔走し始める。ジロー Giraud 将軍がアイゼンハワー Eisenhower 将軍に直接会い懇請した結果、サン＝テグジュペリの復帰が許可される。彼は3年前に止めてしまっていた飛行機の操縦を再開する。

1943年7月21日、フランス上空1万メートルを偵察飛行し、ローヌ河の谷を写真撮影し帰還する。8月1日、2回目の偵察飛行から帰還した時、着陸に失敗し、飛行機は滑走路から飛び出してしまふ。それが原因で、P38 ライトニング機を操縦できる年齢をはるかに超えていたサン＝テグジュペリは、飛行を禁止される。兵役復帰のためにあらゆる努力をしたが、すべて失敗する。エーカー Eaker 将軍に直接会見し、2/33 飛行大隊への再復帰と戦闘機操縦の許可を得る。

1944年5月8日、2/33 飛行大隊は、ナポリからサルジニアのアルゲロ Alghero に移動する。サン＝テグジュペリはP38 ライトニング機に乗り偵察飛行を再開する。6月8日、エンジンが火を噴くが無事帰還する。6月15日、酸素吸入器が故障し、引き返す。6月24日、燃料タンクの故障。6月29日の誕生日には、1個のエンジンで、コルシカ島のボルゴ・バステア Borgo-Bastia に緊急着陸。

1944年7月17日、飛行大隊はコルシカ島のボルゴ基地に移動する。ガヴワール Gavaille は6月29日の事故について、サン＝テグジュペリに忠告を与えようとして、彼の部屋に行く。サン＝テグジュペリは、まだ飛ばせてくれ、飛行禁止命令が下れば生きて行けない、と叫ぶ。フランスに戻る日が近づいているというガヴワールの話をかえぎる。彼は、自分にはフランスへの帰還があり得ないことを知っている。『城砦』の原稿が詰まったスーツケースをガヴワールに手渡し、保管を頼む。

1944年7月31日8時45分、サン＝テグジュペリはP38の223号機に乗ってボルゴ基地から飛び立ち、行方不明になる。幾人かの人たちが、7月31日、2機のドイツ戦闘機に襲撃されたらしいP38機がアンチーブ Antibes とカーニュー＝スュール＝メール Cagnes-sur-Mer 間にあるピオ Biot の町の民家をかすめて墜落するのを見た、と証言している。また、そこから100キロメートル離れたラ・シオタ La Ciotat では、ある人が、炎に包まれたP38機が海に落ちるのを見た、と証言している。

## II. 『星の王子さま』の反復されるテーマ

### 1. レオン・ウェルトに

サン＝テグジュペリは、この作品を、ドイツ占領下のフランスで《人質》になっている、ユダヤ人である親友レオン・ウェルトに捧げている。彼は、子供たちにではなくウェルトという大人に捧げたことについて、3つの言い訳をし、子供たちに許しを請っている。そして、「この

ような言い訳だけではまだ不十分であれば、この大人の人も昔は子供であったのだから、その子供にこの本を捧げたい<sup>1)</sup>とさえ言っている。そして献辞を書き改める。「子供だった時のレオン・ウェルトに<sup>2)</sup>

どうしてサン＝テグジュペリはこれほどまでに子供向けに書いたことを強調するのか。そのことは後に分かるであろう。

## 2. ボアの外側の絵と内側の絵

サン＝テグジュペリは6歳の時、原始林に関する本の中で、野獣を呑み込もうとしているボア *boa* (熱帯地方産の無毒の大ヘビ) の絵をみる(第1章)。彼は自分で、ゾウを消化しているボアの絵を書き上げる。その絵を大人たちに見せて、こわいでしょう、とたずねると、大人たちは、「どうして帽子がこわいの」と答える。大人たちに分かってもらえるように、ボアの内部を描くと、大人たちは、ボアを描くのを止めにして、地理と歴史と計算と文法に興味を持つようにしなさい、と彼に忠告する。

人間に当てはめれば、ボアの外側の絵は人間の外面を表し、ボアの内側の絵は人間の内面、すなわち心を表している。大人は人間の肉体の中に隠れている心を見ることができないため、その外面だけで人間を判断する。この作品のテーマは第21章に登場するキツネの、「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない<sup>3)</sup>」という言葉によってもっとも的確に表されるが、この話においては、そのテーマがボアの外側の絵と内側の絵によって象徴的に表されている。このテーマは以後もさまざまな象徴的方法によって繰り返し表される。

## 3. 箱の絵

第2章は次のように始まる——「それでぼくは、6年前にエンジンが故障してサハラ砂漠に墜落するまで独りで生きてきました。ぼくの飛行機のエンジンのどこかがこわれたのです。機関士も乗客もそばにいなかったので、ぼくはむずかしい修理をたった独りでやってのけようと思いました。ぼくにとっては、生死の問題でした。1週間分の飲み水がかろうじてあるだけでした<sup>4)</sup>

夜明けにサン＝テグジュペリは、「ヒツジを描いて！」と言う小さな声を聞く。そう言ったのは全く風変わりな男の子である。「これが、ぼくが後に描き上げたその男の子のもっともよくできた肖像画です。だがぼくの絵は、モデルよりずっと美しくないことは言うまでもありません。それはぼくの責任ではありません。ぼくは6歳の時に大人によって画家になることを断念させられ、ボアの外側の絵と内側の絵を描く以外には、何も描く勉強をしませんでしたから<sup>5)</sup>

この男の子は不思議な子である。「ところでぼくの小さな男の子は、道に迷っているようにも、疲労で死にそうにも、おなかがすいて死にそうにも、のどが渇いて死にそうにも、恐れで死にそうにも見えなかった。彼は人の住んでいるあらゆる土地から千マイルも離れた砂漠の真ん中で道に迷った子供には全く見えませんでした<sup>6)</sup>

1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Œuvres*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, Gallimard, [© 1959], p. 407.

2) *Ibid.*, p. 407.

3) *Ibid.*, p. 474.

4) *Ibid.*, p. 413.

5) *Ibid.*, p. 414.

6) *Ibid.*, p. 414.

サン＝テグジュペリはその男の子に「ヒツジを描いて」と何度もせがまれて、ヒツジの絵は描けないので、ボアの外側の絵を描く。男の子が「ゾウを呑み込んだボアの絵なんかいない」と言うのを聞いて、サン＝テグジュペリは驚く。彼はヒツジの絵を3枚描きますが、どれも男の子の気に入らない。彼は我慢できなくなって、箱だけ描いて、「きみのほしいヒツジはその中にいるよ」と言ってその絵を男の子に投げつけると、男の子の顔が輝く。このようにして、彼は王子と知り合いになった。

第1章において、ゾウを呑み込んだボアの外側の絵と内側の絵によって表された「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」というこの作品のテーマが、ここでは王子がその中にヒツジを見ることができる箱の絵によって表されている。心でもものを見ることができる王子のような人間こそ、サン＝テグジュペリが探している人間であった。

#### 4. トルコの天文学者

サン＝テグジュペリは王子と話をしているうちに、王子がどこから来たのか分かる（第3章）。王子のやってきた星は、地球とは別の非常に小さな星である。王子はサン＝テグジュペリの描いたヒツジを、そこに連れて行こうとしている。「きみが箱をくれたのでよかった、夜にヒツジの家になるから」

サン＝テグジュペリは、王子の星は小惑星B612番であると信じている（第4章）。その小惑星は、1909年にトルコの天文学者によって、望遠鏡で一度だけ見られた星である。「それでその天文学者は、国際天文学会議で自分の発見について立派に証明しました。しかし彼の服装の故に、だれも彼の言うことを信じませんでした。大人とはそのようなものです。／幸い小惑星B612番の評判を得るために、トルコの独裁者が、違反すれば死刑にするとおどかして、人民にヨーロッパ風の服装をするように命じました。天文学者は1920年に、非常に上品な服を着て再び証明しました。今度はすべての人が納得しました」<sup>7)</sup>

この話には、服装という目に見えるものによって人を判断すれば判断を誤ることがあり、正しい判断をするには目に見えないものに頼らなければならないという教訓が示されている。ここでは、服装によって人を判断するという、われわれが日常よく行っていることを取り上げて、「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」というテーマを具体的な例によって示している。

「ぼくはこの本を深く考えずに読んでもらいたくないのです。王子さまとの思い出を話すのがとてもつらいんです。ぼくの友達がぼくの描いたヒツジをつれて立ち去ってから、もう6年にもなります。あの友達のことをここに書こうとするのは、あの友達を忘れないようにするためなのです」<sup>8)</sup>。「深く考えずに読んでもらいたくないのです」というこの言葉は深く重い。サン＝テグジュペリは、心でもものを見ることができる人、この本の真実を把握できる人に読んでもらいたいと懇願している。

「しかしぼくは、不幸にして箱の中のヒツジを見ることができません。いくぶん大人のようになってしまったのかもしれませんが」<sup>9)</sup>。以後何度も彼は、自分もまた心でもものを見ることができない、したがって大切なものを把握できない大人になってしまったのではないかと疑うであろう。

7) *Ibid.*, p. 421.

8) *Ibid.*, p. 422.

9) *Ibid.*, p. 423.

### 5. 3本のバオバブ

サン＝テグジュペリは王子から恐ろしいバオバブの話聞いた(第5章)。王子の星には恐ろしいバオバブ baobabs の種がある。それらは伸びてしまってからでは完全に抜き取ることができなくなるので、芽を出した時に抜き取らなければならない。抜き取らないでいるとどんどん生長し、星の表面を覆い隠し、その根で星に穴をあける。星が小さくバオバブが多ければ、星は破裂する。バオバブの芽を取り除くのは、王子の早朝の仕事であった。王子はサン＝テグジュペリに、フランスの子供たちが星旅行する時、バオバブの生い茂った星に行かないように警告するために、バオバブの立派な絵を描くように勧める。それでサン＝テグジュペリは、3本のバオバブで覆い隠された星の絵を描く。

絵に描かれた大木に成長した3本のバオバブは、心でものを見ることができない大人と考えてよいのではなかろうか。バオバブの醜悪は大人の醜悪である。

王子は日没が大好きである(第6章)。王子の星は非常に小さかったので、自分の星にいた時彼は、椅子少し引くだけで、いつでも日没を見ることができた。1日に43度も日没を見たことがあった。サン＝テグジュペリは、こんなにも日没の好きな王子には、非常に悲しいことがあるにちがいないと思う。王子の悲しみの原因は次第に明らかになって行くであろう。

### 6. バラの花

砂漠に墜落してから5日目(第7章)。王子が、「花のとげは何の役に立つの」とサン＝テグジュペリに聞く。サン＝テグジュペリはエンジンのボルトをはずすのに忙殺されていたので、いいかげんに答える。「とげは何の役にも立たない。花が意地悪だからだ!」。その言葉を信じない王子がサン＝テグジュペリを問い詰めると、サン＝テグジュペリは、「ぼくはでたらめに答えたんだ。ぼくは大事なことをしてるんだ」と言う。すると王子は、「きみは大人のような話し方をするね!何もかもごたまぜにしている!」と言う。

王子は怒って、なぜ花が苦勞してとげをつくるのかを理解することは大切なことであると力説する。王子の星には世の中に1つしかない花があることが明らかになる。「もしぼくが、世の中にたった1つしかない、ぼくの星以外にはどこにも存在しない花を知っていて、小さなヒツジがある朝、わけが分からずに、こんなふうに一口でその花を食べてしまうことがあるとすれば、それが大事なことではないと言うの!」<sup>10)</sup>。そしてさらに、王子がその花を愛していることも明らかになる。「だれかが何百万もある星のうちの1つにしか存在しない花を愛しているとすれば、それだけで星を眺める時、その人は幸福になれるのだ。その人は、『ぼくの花があそこどこかにある……』と思う。しかしもしヒツジが花を食べてしまったら、その人にとっては、すべての星が突然消えてしまったかのようにになってしまう!それでもそれが大事なことでないと言うの!」<sup>11)</sup>。王子は自分の愛している花がヒツジに食べられてしまうかもしれないと思い、悲しくなり突然泣き出す。サン＝テグジュペリは自分が生命の危険にさらされていることをすっかり忘れ、王子を慰めようとする。

王子は、サン＝テグジュペリが描いた空の箱の中にヒツジを見ることができた。今度は彼は、そのヒツジに自分の星の愛している花が食べられてしまうのではないかと心配する。王子はなんと想像力が豊かなのだろう。彼は心でものを見ることが出来る人である。彼は大人のようにってしまったサン＝テグジュペリを見捨てることはなく、彼の中に子供に還れる可能性を認

10) *Ibid.*, pp. 431-432.

11) *Ibid.*, p. 432.

め、彼を導いて行くであろう。

サン＝テグジュペリは、すぐに王子の愛している花のことをもっとよく知るようになる（第8章）。どこからか運ばれてきた種から芽を出した花である。その花はつぼみをつけたが、美しく輝いて現れたかったので、花開く前に念入りに化粧をする。ある日の朝、花は姿を現す。素晴らしく美しい花であるが、虚栄心の強い、気むずかしい花であり、そのために王子は苦しむ。花は言う。「爪のある虎が来るかもしれない」。「わたしは草ではありません」。「ついたてを立てて下さい」。「夕方にはガラスの器をかけて下さい」。これらの言葉を聞いて王子は、花を激しく愛していたにもかかわらず、すぐに花の気持ちを疑うようになる。

今サン＝テグジュペリは、胸中を打ち明ける。「ぼくはその時何も理解できなかったんだ！言葉でなく行為でその花を判断すべきだったんだ。花はぼくをかぐわしくしてくれたし、ぼくを照らしてくれたんだ！ぼくは決して逃げだすべきじゃなかったんだ！悪賢さの背後に隠されている愛情を見抜かなければならなかったんだ。花というのは思っていることと別なことを言うんだ！だが、ぼくはあまりに若すぎて、花を愛するすべを知らなかったんだ」<sup>12)</sup>

王子はバラの花の心を見抜くことができず、虚栄心の強い、気むずかしい花であると判断してしまった。もし彼が心で見ているならば、彼をかぐわしくし、彼を照らしてくれたバラの花の素晴らしさを発見し、バラの花を愛し続けることができたであろう。

王子はバラの花と一緒にいることに耐えることができなくなり、自分の星を去る決心をする（第9章）。去るに際して、自分の星の活火山と休火山も念入りに掃除する。王子はバラの花に、「さようなら」と言う。バラの花を非難するようなことは何も言わず、「幸せになって。わたしあなたがとても好きだったのよ」と言う。王子はバラの花と別れ、旅へ出発する。別れの時にバラの花がどんなに悲痛な気持ちを抱いていたかをやがてははっきりと知り、王子はバラの花への気がかりを募らせながら旅を続けるであろう。

## 7. 奇妙な大人

王子が最初に訪ねた星は王の星である（第10章）。その王にとって人間はすべて家来なので、王子も家来にさせられてしまう。王が支配しているのは、目に見えるすべての星である。王は無理な命令はしない。例えば、夕日が見たくなった王子が、命令して夕日が見れるようにして下さい、と言うと、王はカレンダーを調べて、夕方の7時40分ごろまで待つように、と言う。王は王子に、法務大臣になって自分自身の裁判をしるとか、ネズミの裁判をしるとか命じるが、王子は拒否する。

次に王子は、うぬぼれの強い男の住んでいる星を訪ねる（第11章）。「自分に感心している人が来た」と、うぬぼれの強い男は叫ぶ。うぬぼれの強い男にとっては、他の人はすべて自分に感心している人である。その男が「手をたたきなさい」と言うので、王子が手をたたくと、その男は帽子を持ち上げて挨拶する。

王子は酒飲みの星を訪ねる（第12章）。王子は酒を飲んでいる酒飲みに、次々と質問を浴びせる。この質問によって、酒飲みが酒を飲む理由が明らかになる。酒飲みは、酒を飲むのが恥ずかしいから酒を飲むのである。

王子が4番目に訪れた星は実業家の星である（第13章）。王子が来ても顔を上げず、「おれは真剣なんだ」と言いながら、実業家は星を数えている。王子は「5億の星をどうするの」から始めて、次々と実業家に対して鋭い質問を浴びせる。実業家は自分の周囲に見えるすべての星を

12) *Ibid.*, p. 435.

自分の財産と見なし、その財産管理のために毎日一日中星の計算をしていることが明らかになる。

王子が訪れた5番目の星には点灯夫が住んでいて、1つしかない街灯の火を監視している。点灯夫は昔は朝に火を消し、晩に火をつけていればよかったが、年々ますます速く星が回るようになったため、1分間に1度火をつけたり消したりしている(第14章)。ル・イールによれば、この点灯夫は完全に機械化された仕事に従事しているうちに馬鹿になってしまった人間を表しており、点灯夫についての話は機械化された社会の批判となっている<sup>13)</sup>。

王子は6番目に、年老いた地理学者が住んでいる星を訪ねる(第15章)。この地理学者は研究室に閉じこもっていて、探検家を迎えて質問し、探検家の話をノートにとるだけなので、自分の星に海や山があるのかどうかさえも分からない。地理学者は王子に王子の星について話すよう頼み、彼の話を書き取る。王子は、火山が3つと花が1つあります、と言う。すると地理学者は、花ははかないから書き留めない、と言う。はかないとは「すぐに消えてしまう」という意味だと地理学者に教えられ、王子は自分の星に残してきたバラの花のことが気になる。ル・イールが述べているように、地理学者についてのこの話には、あまりにも専門化されすぎた現代の学問に対する批判が認められる<sup>14)</sup>。

訪ねた6つの星で出会った人物のうち、王子は、「自分自身以外のことに一所懸命になっている」点灯夫だけは滑稽だと思わなかったが、他の人物は奇妙で、変わっていると思った。著者サン＝テグジュペリは、王子という子供の眼を通して、大人の愚かさを誇張して示した。ここに描かれた大人は、要するに心でものを見ることができない人間なのである。

## 8. 砂漠のへび

王子が7番目に訪れた星は地球である(第16章)。「地球には、111人の王さま(もちろん黒人の王さまも入れて)、7000人の地理学者、90万人の実業家、750万人の酔っ払い、3億1100万人のうぬぼれの強い男、すなわち約20億人の大人がいます」<sup>15)</sup>。子供を含む地球に住む人間の全体数ではなく、大人の数だけ提示していることに注目すべきである。子供から見ると、大人はすべて奇妙な人間なのである。地球には約20億人も奇妙な人間がいることになる。

王子は地球上の砂漠に降り立つ(第17章)。そこでへびに出会い、すぐ言葉を交わす。空を見上げると、真上に自分の星が光っている。「ここに何しに来たの」とへびに聞かれて、王子は「花と悶着を起こしてしまったんだ」と率直に打ち明ける。「『おれは船よりもっと遠くへおまえを運んで行くことができるんだ』と、へびが言った。／へびは金の腕輪のように、小さな王子の足首に巻きついた。／『おれのさわったやつをそいつが出てきた土地に返してやる』と、さらにへびが言った」<sup>16)</sup>。その毒でへびに殺された人の魂は、どんなに遠くまでも飛んで行くことができる。王子はへびの言った言葉を思い出すであろう。

王子は砂漠を横切り、1本の花に出会う(第18章)。王子が「人間たちはどこにいるの」と尋ねると、花は「どこに行ったら見つかるのか分かりません。人間たちは風に引っ張り回されています。根をもたないので、とても不自由なのです」と答える。

王子は高い山に登る(第19章)。「『なんて変な星だろう!』と、その時王子は思いました。『乾き切って、とんがりだらけで、塩気に満ちている。それに人間たちには想像力が欠けてい

13) LE HIR (Yves), *Fantaisie et mystique dans «Le Petit Prince» de Saint-Exupéry*, Paris, Nizet, 1954, p. 69.

14) *Ibid.*, p. 69.

15) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 460.

16) *Ibid.*, p. 462.



る。人間たちは人の言うことを繰り返すだけだ……。ぼくの星には花があった。花はいつも自分の方から話し始めた……』<sup>17)</sup>。王子は自分の星のバラの花のことを思い出す。

王子は道を見つけ、歩いて行く（第20章）。バラの花が咲いている庭に出る。たくさん咲いているバラの花を見て、王子は悲しい気持ちになる。「王子の星の花は、自分のような花は世界中で自分だけである、と王子に語っていた。ところがそこには、たった1つの庭に同じような花が5000もあった！」<sup>18)</sup>

王子はこの世に1つしかない花を所有していると信じていたが、それが普通のバラの花であるのを知って落胆し、草の上に横になって泣く。この時の王子には、「この世に1つしかない」という言葉の意味がまだ分からない。しかし王子は、やがてそれを知るであろう。

### 9. キツネの言葉

キツネが現れる（第21章）。王子が「ぼくと遊んでくれない」と言うと、「きみとは遊べない。ぼくは飼いなさらされていないから」と、キツネが言う。王子には、「飼いならす」*apprivoiser* という言葉の意味が理解できない。キツネがその意味を王子に説明してくれる。「それは『絆をつくる』*créer des liens* ということなんだ。／きみはまだぼくにとっては、10万人の少年と全く同じ少年にすぎない。それでぼくはきみを必要としない。きみもまたぼくを必要としない。ぼくはきみにとっては、10万人のキツネと同じキツネにすぎない。だがもしきみがぼくを飼いならせば、ぼくたちはお互いを必要とするようになるんだ。きみはぼくにとってこの世に1人しかいない人になるんだ」<sup>19)</sup>。「きみがぼくを飼いならせば、ぼく的生活は日に照らされたように輝くだろう」<sup>20)</sup>。キツネの説明を聞き、王子は「飼いならす」という言葉の意味を理解する。そして、王子はキツネを飼いならす。「バラの花をまた見に行ってみなさい。きみのバラの花がこの世に1つしかないものであることが分かるから」とキツネに言われて、王子はバラの花のところへ行く。王子は今、自分のバラの花がこの世に1つしかないものであることをはっきりと理解する。「『あなたがたは美しいけれど空っぽだ』と、王子はバラの花たちに言いました。『あなたがたのために死ぬことはできない。もちろん普通の通行人なら、ぼくのバラの花があなたがたに似ていると思うかもしれない。でもぼくのバラの花はただ1つだけだ、あなたがたすべてより大切なんだ。というのは、ぼくが水をかけてやったバラの花だからだ。ガラスの器をかぶせてやったバラの花だからだ（チョウになるように、2、3匹は殺さないでおいだが）。不平も聞いてやったし、自慢も聞いてやったし、時には沈黙にさえ耳を傾けてやったバラの花だからだ」<sup>21)</sup>。王子は、自分の星のバラの花がこの世に1つしかないものであることをはっきりと理解した。

キツネは別れの贈り物として、次のような言葉を贈る。「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」<sup>22)</sup>。そしてさらにキツネは言う。「きみは、きみの飼いならしたのものには永久に責任が生じるのだ。きみはバラの花に責任があるのだ……」<sup>23)</sup>

キツネの話聞き、王子はこの世に1つしかないバラの花に対する責任を果たしていなかつ

17) *Ibid.*, p. 466.

18) *Ibid.*, p. 466.

19) *Ibid.*, p. 470.

20) *Ibid.*, p. 470.

21) *Ibid.*, p. 474.

22) *Ibid.*, p. 474.

23) *Ibid.*, p. 476.

たことに気づき、深く反省した。王子はその反省の上に立って、その責任を果たすことに懸命に努力するであろう。そして王子は、「心で見ると」ことに努力するであろう。

王子は転轍手に出会う（第22章）。列車が2人の前を右へ左へと通り過ぎて行く。「『最初の旅客を追いかけられているんだね』と、王子さまが聞きました。／『旅客は何も追いかけはしていない』と、転轍手が言った。『彼らは中で眠っているか、そうでなければあくびをしてるんだ。子供たちだけが、窓ガラスに鼻をびったりと押しつけているんだ』。／『子供たちだけが、自分たちの探しているものが分かっているんだ』と、王子さまが言いました。』<sup>24)</sup>。

王子は、喉の渇きをいやす完璧な丸薬を売っている商人に出会う（第23章）。1週間に1粒飲み込むと、もう何も飲む必要がない。1週間に53分も儉約になる。「『53分使うことができれば、ぼくは静かに泉の方へ歩いて行くだろう……』と、王子は思った」<sup>25)</sup>

### 10. 砂漠の中の井戸

砂漠に墜落して8日目である（第24章）。サン＝テグジュペリはまだ飛行機の修繕を終えていない。貯えの水が全くない。王子が「井戸を探しに行こう」と、サン＝テグジュペリに言う。サン＝テグジュペリは無限に近い砂漠の中を、当てもなく井戸を探すのはばからしいことだと思ったが、王子とともに出発する。王子は言う。「水も心にいいかもしれない」<sup>26)</sup>。「星には目に見えない花があるから美しいのだ……」<sup>27)</sup>。「砂漠が美しいのはどこかに井戸を隠しているからだ……」<sup>28)</sup>。サン＝テグジュペリは、「大切なものは目には見えないのだ」ということをはっきりと体得する。彼は眠ってしまった王子を抱いて歩いて行く。「ぼくは、月の光に照らされた王子の青白い額・閉じた目・風に震えている髪の毛を見ていました。ぼくは思っていました。『ここに見えるのは表面 une écorce にすぎない。大切なものは目には見えないのだ……』」<sup>29)</sup>。「『眠っている小さな王子さまがこんなにも強くぼくの心を動かすのは、彼が花を思い続けているからだ。眠っている間も、ランプの炎のように、バラの花の姿が彼の中で輝いているからだ……』」<sup>30)</sup>。夜明けに、サン＝テグジュペリは井戸を発見する。

王子はサン＝テグジュペリと一緒に井戸を探すという行為を通して、キツネが教えてくれた「大切なものは目には見えない」という教えを、観念としてではなく、井戸を探すという現実の場で具体的にサン＝テグジュペリに教えようとした。王子の指導を受けて、サン＝テグジュペリは心でものを見ることができるようになった。ここに至ってついに、王子とサン＝テグジュペリは真の友として完全に結ばれた。

「夜明けに、ぼくは井戸を発見した」<sup>31)</sup>というこの章の最後の言葉は意味深い。それは、「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」という真理をサン＝テグジュペリが把握できたことを意味する。

井戸には、滑車もつるべも綱も備わっている（第25章）。サン＝テグジュペリは水を汲み、王子に与える。「王子は目をつぶって飲みました。それは祭り une fête のようにおいしかった。

24) *Ibid.*, p. 477.

25) *Ibid.*, p. 478.

26) *Ibid.*, p. 479.

27) *Ibid.*, p. 479.

28) *Ibid.*, p. 479.

29) *Ibid.*, p. 480.

30) *Ibid.*, p. 480.

31) *Ibid.*, p. 480.

その水は、食べ物とは全く別のものでした。その水は、星の下を歩いた後で、滑車の歌とぼくの腕の力から生まれた水でした。それは、贈り物のように心にとってよい水でした。」<sup>32)</sup>

サン＝テグジュペリが王子と同じように心でものを見ることが出来る人になるには、焼けつくように渴いた喉をして、砂漠の中を井戸を求めて歩むという苦しみを経なければならなかった。王子はサン＝テグジュペリが汲んでくれた水を飲んだ。サン＝テグジュペリもその水を飲んだ。2人が同じ井戸の水を飲んだということは、心でものを見ることができるようになった2人が愛によって堅く結ばれたことを意味する。

「小さな王子はぼくに言いました。『ねえ、明日は地球に降りてきた一周年記念日なんだ……』。／それからしばらく黙った後で、王子はさらに言いました。『ぼくはこのすぐ近くに降りて着たんだ』。／そして彼は顔を赤らめました』<sup>33)</sup>。サン＝テグジュペリは続けて王子にいくつかの質問をする。その度に王子は顔を赤らめる。

王子はなぜ顔を赤らめたのであろうか。王子はヘビに噛まれて自ら命を絶とうとしている。自殺は恥ずべき行為であることを王子は知っているのに、その決意を隠しておけなく王子にさせるようなサン＝テグジュペリの質問を受けて、王子は顔を赤らめたのである。

王子の真剣な様子を見て、サン＝テグジュペリは王子が何か重大な決意をしていると感じ、不安になる。明日の晩会う約束をして、2人は別れる。

#### 11. 捨てられた古い皮

次の日の晩、サン＝テグジュペリは王子のところに戻って来る（第26章）。王子は誰かと話している。「ぼくの足跡が砂の中のどこで始まっているか確かめてくれ。ぼくをそこで待っていてくれればいいんだ。今夜そこへ行くから」。「きみはいい毒を持っているんだろ。長く苦しめたりしないね」。サン＝テグジュペリには何のことも分からない。王子に噛みつこうとしているヘビを見つけ、彼は驚く。彼は雪のように真っ青な王子を抱き締める。王子がヘビと今夜のことを打ち合わせていたのだということは、サン＝テグジュペリには分からない。王子が顔を真っ青にしたのは、ヘビとの話をサン＝テグジュペリに聞かれたと思ったからである。

サン＝テグジュペリが何も説明しないのに、王子が言う。「機械の欠陥が見つかってうれしい。きみは自分の星へ帰って行けるんだ」。「ぼくも今日自分の星に帰るんだ」。サン＝テグジュペリは、自分の星に帰ろうとする王子の決意を知る。サン＝テグジュペリが「きみの笑い声をもっと聞きたい」と言うと、王子は彼に笑いの贈り物をする。「ぼくはあの星のどれか1つに住み、あの星のどれか1つで笑うから、きみが夜空を眺める時に、きみにとってすべての星が笑っているように見えるだろう。きみは笑うことのできる星を見れるだろう！」<sup>34)</sup>

王子はまた真剣になる。今夜死んだようになるんだから来てはいけない、と王子が言う。サン＝テグジュペリは「きみとは離れない」と言う。その夜、王子はこっそりと出発する。サン＝テグジュペリは首尾よく追いつく。王子は言う。「遠すぎるんだ。ぼくはこの体を運べないんだ。重すぎるんだ」。「捨てられた古い皮 *une vieille écorce* のようになるんだ」。「ぼくは花に責任があるんだ！ほんとにか弱いんだ！」。王子は立ち上がり、歩き出す。「王子の足首のそばに、黄色い光がきらっと光っただけでした。彼はちょっとの間じっとしていました。彼は叫びませんでした。彼は1本の木が倒れるように静かに倒れました。砂だったので、音は全くしま

32) *Ibid.*, p. 483.

33) *Ibid.*, p. 484.

34) *Ibid.*, p. 489.

せんでした」<sup>35)</sup>

王子は毒へびに噛まれて、自分で自分の命を絶った。「古い皮」である肉体を脱ぎ捨て、魂だけとなって自分の星のバラの花のもとに帰った。王子は1年前に、その心を見抜けず、その表面的な様子でバラの花を判断し、気むずかしい、わがままな、虚栄心の強いバラの花を嫌い、その花から逃げたのであった。王子は地理学者が「花ははかないものだ」と言うのを聞いて、自分の星の花のことが気になった。飼いならせば、すなわち絆をつくれば、そのものはこの世に1つしかないものになる、とキツネに教えられ、王子は自分のバラの花がこの世に1つしかないものであることを理解した。さらに、「きみはきみが飼いならしたものに永久に責任があるんだ。きみはバラの花に責任があるんだ」とキツネに言われ、王子はバラの花を見捨てた行為を深く反省した。王子は心でバラの花を見ないで、その言動だけによってバラの花は悪い花であると判断し、さらにバラの花から逃げさえもした。許しがたいこの2つの過ちを償い、バラの花に対する責任を果たすために、王子は自分の命を断つという手段を取った。そうすることによって、王子は自分の肉体を脱ぎ捨て、自分の心だけをバラの花に与えたのである。

すでに王子は、かつて絆を結び所有したことのあるバラの花に責任があること、その責任はバラの花を永遠に愛することによって果たされることを知っていた。王子は死ぬことによって、心を、真の愛をバラの花に捧げ、バラの花を永遠に愛するという義務を忠実に果たした。肉体を脱ぎ捨てただけをバラの花に与えるという行為は、この作品で繰り返されている「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」というテーマの実践である。肉体という外面に隠された目にみえない内面である心を、王子はバラの花に与えたのである。

王子が砂漠の中を死に向かって歩む姿は、キリストが重い木の十字架を担いで処刑場のゴルゴダの丘へ向かう姿に比べられるであろう。キリストが受難後復活するように、王子も輝く星となって復活する。

## 12. 5億の鈴

サン＝テグジュペリは自分の家に戻ることができた(第27章)。あの時からすでに6年が過ぎた。「王子が自分の星に戻ったことは確かです。なぜなら夜が明けた時、王子の体を見つけることができなかつたからです。そんなに重い体ではありませんでした……。夜ぼくは、星の響きに耳を傾けるのが好きです。それは5億の鈴のようです……」<sup>36)</sup>。サン＝テグジュペリは、王子に描いてやった口籠に皮ひもをつけるのを忘れたので、王子がヒツジに口籠をつけられず、それでバラの花がヒツジに食べられたかもしれないと心配する。「ぼくは『小さな王子さまはバラの花にガラスの覆いかぶせ、ヒツジをよく見張っている……』と思うことがある。そうするとぼくはうれしくなる。すると、すべての星が静かに笑う」<sup>37)</sup>。「ぼくは『王子さまがある晩ガラスの覆いを忘れたか、ヒツジが夜の間にこっそり外に出た……』と思うことがある。そうすると鈴はすべて涙に変わってしまう!……」<sup>38)</sup>

サン＝テグジュペリは、王子に会えない今の寂しさ、王子に会いたいという強い希望を述べている(あとがき)。

35) *Ibid.*, p. 493.

36) *Ibid.*, p. 493.

37) *Ibid.*, p. 493.

38) *Ibid.*, p. 495.

## Ⅲ. 『星の王子さま』の真実

キツネが別れの贈り物として王子に贈った「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」という言葉が、『星の王子さま』のテーマである。第Ⅱ章で示したように、このテーマは作品の中で何度も繰り返される。整理して示せば、このテーマは次のようなものによって表された。①人間の外面を表すボアの外側の絵と人間の内面を表すボアの内側の絵（第1章）。②王子がその中にヒツジを見ることができる箱の絵（第2章）。③非常に上品な服を着て自分の発見した星について証明し、発見を初めて信じてもらうことができた天文学者の話（第4章）。④心でものを見ることができない大人と考えられるであろうバオバブ（第5章）。⑤心でものを見ることができる王子は、彼が箱の中に見ることができるヒツジに、自分の星の愛している花が食べられてしまうのではないかと心配する（第7章）。⑥心でものを見ることができない奇妙な大人——王（第10章）、うぬぼれの強い男（第11章）、酒飲み（第12章）、実業家（第13章）、地理学者（第15章）。⑦キツネの贈り物——「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」（第21章）。⑧王子の言葉——「星が美しいのは、目に見えない花があるからだ」、「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからだ」（第24章）。⑨眠っている王子を見つめながら、サン＝テグジュペリは思う——「ここに見えるのは表面にすぎない。大切なものは目には見えないのだ」（第24章）。⑩王子は毒ヘビに噛まれて、自分の命を絶ち、「古い皮」である肉体を脱ぎ捨て、魂だけとなって自分の星のバラの花のもとに帰る（第26章）。⑪王子は星のどれかに住んでいるので、5億の星が鈴のような音を立てる（第27章）。

このように『星の王子さま』においては、「心で見なければものはよく見えない。大切なものは目には見えない」というテーマは、直接的あるいは間接的表現をとりながら、冒頭から繰り返されてきて、ついには王子が毒ヘビに噛まれて自分の命を絶つという劇的な行為によって表現される。王子は肉体を脱ぎ捨て、自分の心をバラの花に与えた。王子のこのような行為によって、そのテーマは感動的に強烈に表現される。このような表現を用いてまで、著者サン＝テグジュペリはこのテーマを執拗に何度も繰り返した。この繰り返しは彼の叫びに相当するのではなからうか。彼の叫びの意味は、心でものを見ることができる人だけが知り得るであろう。

さらに突き進んで、この作品に描かれているすべてのものは「目に見えるもの」であり、そこに打ち明けられていないサン＝テグジュペリの秘密は「目に見えないもの」であると考えることができるであろう。心でものを見ることができる人だけが、その秘密を把握できるであろう。

『星の王子さま』に描かれた王子の歩みと、第Ⅰ章で示した、1940年8月の動員解除後の著者サン＝テグジュペリの歩みは非常に似通っている。王子はバラの花の心を見抜くことができず、虚栄心の強い、気むずかしい花であると判断し、花を見捨てて自分の星を去った。そして彼は星を巡り歩き、奇妙で愚かな大人たちに出会った。最後に地球を訪れ、人を遠くへ運ぶことができるヘビに会い、大切な贈り物をしてくれたキツネに会い、そしてサン＝テグジュペリに会い真の友人となった。そして王子は自分で自分の命を絶ち、肉体を脱ぎ捨て、魂だけとなって自分の星のバラの花のもとに帰った。

一方著者サン＝テグジュペリは1940年に動員解除になった後、自分の国であるフランスを去り、アメリカに亡命した。アメリカには彼に敵対するたくさんのフランス人がいた。フランス人同士が侮辱し合い、密告し合って、互いに激しく相争っていた。彼はナチ、ファシストと呼ばわりされさえした。彼は戦争を忘れることなく、戦闘に参加しなければならないいつも考

えていた。ヨーロッパでの戦闘に参加できるようになるべき筋に働きかけた。アメリカ当局に執拗に働きかけた結果、参加が認められた。1943年にアルジェに上陸し、昔の2/33飛行大隊へ復帰できるよう奔走した。執拗な懇請の結果、復帰が許可され、飛行機の操縦を再開する。43歳になっていたけれども懸命に努力し、彼は高性能のP38ライトニング機を操縦できるようになった。1943年7月、フランス上空1万メートルを偵察飛行した。空からではあったが、彼はまたフランスに戻った。しかし2回目の偵察飛行から帰還した時、着陸に失敗した。P38機を操縦できる年齢をはるかに超えていたサン＝テグジュペリは飛行を禁止される。彼はアメリカ軍に懇請し、再復帰と飛行機操縦の許可を得た。何度かトラブルに出会ったが、彼はフランスへの偵察飛行の任務を果たした。しかし1944年7月31日、サン＝テグジュペリはP38の223号機に乗ってボルゴ基地からグルノーブル Grenoble、アヌシー Annecy 方面（夢に包まれた限りなく楽しい少年時代を過ごしたサン＝モーリス＝ド＝ルマン Saint-Maurice-de-Re-mens の方向）へ飛び立ち、行方不明になった。

故国を去りアメリカに行き、そこで彼は敵対する多くの人に出会い絶望し、飛行隊に復帰し、フランス上空に飛び立ったまま戻らなかったサン＝テグジュペリの歩みは、バラの花のいる自分の星を去り、星巡りの旅で多くの愚かな人たちに会い、地球に来てバラの花に対して責任があることを知り、自分の星へ戻る王子の歩みに一致している。サン＝テグジュペリは魂となって、ドイツの占領下で苦しんでいる親友レオン・ウェルトそして同胞のもとに戻り、王子もまた魂となって自分の星のバラの花のもとに戻った。

1944年7月31日にサン＝テグジュペリはこの世から消え去った。彼の飛行機はドイツの戦闘機によって撃墜されたと一般には信じられているが、まだ疑問が残っている。今だに彼の飛行機も彼自身も見つかっていないからである。あるジャーナリストは自殺したのかもしれないと語った。これは真実ではないかもしれないが、故国を去って以来のサン＝テグジュペリの歩みは、前に見たように死に向かっての必死の歩みのように思える。

『星の王子さま』は深い意味をもつ作品である。サン＝テグジュペリ自身作品の中で、「ぼくはこの本を深く考えずに読んでもらいたくないのです」と言っている。彼はこの本を子供向けに書いたことを強調しながらも、それをドイツ占領下のフランスで《人質》になっている、ユダヤ人である親友レオン・ウェルトに捧げた。外見は子供向けの本であるという形式をとっているが、サン＝テグジュペリは心でものを見ることができる大人のためにこの作品を書いたのである。